

2025 年度

「ともに世界に意味を創り出す教育をデザインする」
—ひらき、紡がれる実践の可能性を「痕跡」から探る—



奈良女子大学附属幼稚園に身を置く一人ひとりが「ともに」という地平に立とうとすることで、日々どのような実践が営まれてきたのか。その具体像と、それぞれにとってどのような意味が生成されたのかを言語化することを続けてきました。その一つの方法として「ひらく」ことを実質化してきました。方法の一つであった「ひらく」という行為によって計画された保育実践だけではなく、多様な人々や環境との相互作用によって「予期せぬ実践」が生成され始めました。そのことによって「ひらく」という行為の意味が拡張されていることを実感し始めたのです。何が「ひらかれて」いるのか？ 実践から問いが立ち上がりました。

今年度は
「痕跡」から実践の意味を再解釈していくことによって、何がひらかれてきたのかを紐解いてきました。実践の現場で「ひらく」ことの意味が立ち現れていったことによっていかに実践から「知」が生成されていくのかが描き出されました。

研究概要

「ともにある」ということの探究

ともに世界に意味を創り出す教育をデザインする
—ひらき、紡がれる実践の可能性を「痕跡」から探る—



▶ 様々な実践が生成されてきている

方法として「ひらく」ことで
実践として実質化していく

保護者や学生、異校種の教員の
公開保育研修会への参加
園内研修へのお誘い



保護者が仲間として保育に
加わる「保育参加」

地域を超えた他園の先生方との
実践を通じた語り合い

拡張されていく「ひらく」ことの意味

方法としての「ひらく」が実践者の学びを生んできた

- ▶ 社会や地域へ実践や幼稚園という場を公開することそのものであり、方法として捉えていたことへの気づき
- ▶ 互いに作用し合っていることから幼稚園が起点ではないことへの気づき

⇨ 実践から問いが立ち上がる

何が「ひらかれて」いるのか？

「痕跡」を手がかりにする

痕跡：解釈可能性を残した複数の記録
複数の主観的な観察者が違った手段で記録をすることで、集団的に解釈がなされ物語ができる
子どもは自分たちのしたことへの再訪、考察、解釈をすることで知識の共同構築が導かれる
親は子どもの知らなかった側面や互いの考えを交流する機会となる

⇨ 実践の主役者として感じ考えたことを記した記録

今ここで何が生まれたかを残したもの
他者の文脈や価値観が重なることで意味を見出していくもの
その積み重なりから立ち現れた実践そのもの

実践研究報告

1- 保育実践における子どもの語りや保育記録を「痕跡」とした報告

令和7年度 奈良女子大学附属幼稚園実践研究報告会
ともに世界に意味を創り出す教育をデザインするーひらき、紡がれる実践の可能性を「痕跡」から探るー

実践研究報告 1

子どもとともに
「今、ここ」で解け合い意味を編む
ー常に「より善い」を追求する使命を担う教育の此岸でー

奈良女子大学附属幼稚園 立溝まい

社会的背景

ひとは常に「より善い」を目指している

「今」は未来のための道具？
「過去から今」の道はただの往路？
「より善い」とは？

Clear! 課題

現在・未来を語るための手段・方法

20240110 2

私にとっての「ひらき」

- ・自分自身の価値がひらかれる
自身が所有してきた価値を越えて新たな価値へとひらかれる
- ・私が他者の世界にひらかれる
ー私が他者の世界を知ろうとしなければ他者の内的世界を知ることはいない。しかし、「ひらかれる」タイミングがある。すべてが「ひらかれる」わけではない。

自分自身の価値
ともにある存在

他者の世界 わたしの世界

20240110 実践研究報告1 立溝まい 17

2- 保護者が立ち上げた教養講座の実践を「痕跡」とした報告

令和7年度 奈良女子大学附属幼稚園 実践研究報告会
ともに世界に意味を創り出す教育をデザインするーひらき、紡がれる実践の可能性を「痕跡」から探るー

実践研究報告 2

社会的役割の〈やわらぎ〉から紡がれる「声」
ー保護者とともに創る実践の新たな地平ー

奈良女子大学附属幼稚園 穴戸 佳央理

なぜ本報告をするに至ったのか
保護者と「ともにある」

教師と保護者の関係性

- ・教育について伝えるー理解する
- ・教育的サービスを提供するーされる
- ・支援するーされる

不足の補完から 共創へ

ともに学び、ともに創造していくこと
「与える」場から、「生成」の場へ

20240110 実践研究報告2 穴戸 佳央理 3

ひらき、紡がれていく実践

自身の認知的枠組みや前提に目を向ける
ーアイデンティティの再構築ー

ともに考え、揺れ、学び合う場が、協働の関係性へ転換していく土台に
ー与える場から生成の場へー

それぞれの立ち位置の中で、差異を共存させながら、尊重する姿勢

そこでの出会い、生まれる問いの中で、紡がれていくものがある

20240110 実践研究報告2 穴戸 佳央理 19

3- 研究会におけるシンポジウム企画実践を「痕跡」とした報告

令和7年度 奈良女子大学附属幼稚園 実践研究報告会
ともに世界に意味を創り出す教育をデザインするーひらき、紡がれる実践の可能性を「痕跡」から探るー

実践研究報告 3

「与えられた役割」を超えて当事者であるということ
ーシンポジウム企画実践という「痕跡」から探るー

奈良女子大学附属幼稚園 松田 登紀

「与えられた役割」を超えて
「私」はどうありたいのか、を「声」にする場の構築

- ・「与えられた役割」ではなく、「私」はどうありたいのか、を率直に語る場は、組織内には少ない
- ・実践者同士が横につながって対話する場も少ない

↓

- ・課題への対応ではなく、「本質的な問い」に対して自分自身が当事者としてどう考えるのか、について自分の価値観や教育観をひらき、他者と語るきっかけとしての場の構築が可能？

ともに問いを編む場をつくること自体を实践として

20240110 実践研究報告3 松田登紀 3

「ひらき、紡がれる」実践

シンポジウムの企画実践：

事前に主催者側で予測する「ゴール」の枠組みを用意するのではなく、
話題提供やその場での語り、
「与えられた役割」を揺さぶり、
参加者のそれまでの経験との出会いにより
意味が立ち上がり、ひらかれるプロセスと
他者との相互浸透により紡がれた、当事者として感じ、考えたことを
「声」として出せる一つのきっかけになったのではないか

20240110 実践研究報告3 松田登紀 10